

# 舞踊創作における創作経験ならびに不安特性の影響

榎並 恵子・平井タカネ

## 研究の目的

舞踊は、身体の運動によって思想や感情などを表現する活動である。すなわち、舞踊の作品には、創作者の内面が投影されている。体育の授業で行なわれる創作ダンスでは、受講生全員が、作品を創作しそれを発表することを経験するので、個人の性格は、創作された作品だけではなく、舞踊の創作過程にも影響しているといえる。したがって舞踊の創作では、表現することの満足感や快感と同時に、人に見られるという不安も意識されるようである。これは斎藤(1976)が報告しているように、体育の授業で中学生や高校生にしばしば見られる舞踊ぎらいの理由として、「よい動きが浮かばない」「恥かしい」が挙げられていることから推測できる。

不安は、従来1つの現象として考えられていたが、Cattellら(1958)は、状況によって変化する長続きのしない不安と、個人がもともと持っている性格的な不安が存在することを検証し、前者を状態不安(State Anxiety)、後者を特性不安(Trait Anxiety)とよんだ。Spielbergerは、この考えをもとに、1971年State-Trait Anxiety Inventory (STAI)を作成した。そしてBurtonは、1976年に、STAIを用いて、初心者が、ゴルフとアーチェリー、体操、ダンス(バレエ、モダンダンスを含む)などの体育の授業に参加した際のState Anxietyの推移を検討している。それによると、ゴルフとアーチェリー、および体操を受講した者は、15週間後の講義終了時にState Anxiety得点が減少したが、ダンスの受講生は得点が増加するという反対の結果を得て、ダンスの環境の中に、緊張、神経質、心配、不安といった感情の水準を高めるような要因が含まれていると述べている。

本研究は、体育の授業で行なわれている創作ダンスの中から動きのモチーフ創りとそれらを発展させる過程、および作品の発表をとり上げ、舞踊創作経験の有無や不安特性の高低が、課題解決(舞踊創作)時の状態不安、および創作過程での空間の使用や時間の長さによどのような影響を与えるのかを検討し、舞踊創作指導の手がかりを得ようとするものである。

## 方法

1. 被験者 舞踊経験者(体育学専攻生で、舞踊創作実習を履習した者、およびモダンダンス部員)と

未経験者(一般女子大生)を、MAS(顕在性不安検査、三京房版)得点<sup>19)</sup>によって次の4群に構成した。各群いずれも5名である。

- ① 舞踊経験者で特性不安が高い者
- ② 舞踊経験者で特性不安が低い者
- ③ 舞踊未経験者で特性不安が高い者
- ④ 舞踊未経験者で特性不安が低い者

2. 実験手続 8ミリフィルムによって、動きのモチーフを与え記憶させた。動きのモチーフは、以下の4種類である。

- ① 直線的で早い(MM. 184)動き
- ② 直線的で遅い(MM. 46)動き
- ③ 曲線的で早い(MM. 184)動き
- ④ 曲線的で遅い(MM. 46)動き

課題は2種類あり、課題Ⅰは、フィルムで与えた動きのモチーフを使ったり変化させて、まとまりのあるものを創作し、できた作品を発表するもので、「変化創作」とした。課題Ⅱは、フィルムで与えた動き以外の動きのモチーフを創って、まとまりのあるものを創作し、できた作品を発表するもので、「自由創作」とした。両課題ともに、創作時間は10分と限り、できたところで合図をさせた。また10分以上経過した者に対しては、13分を限度とした。創作および作品の発表は、5m四方の空間で行ない、すべてをVTR(ビデオテープレコーダー)に記録した。空間は、分析を容易にするために、図1のように9領域に等区分し、床にビニールテープで+印をつけた。

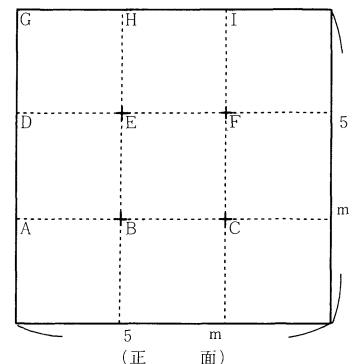


図1. 創作・発表に使用した空間

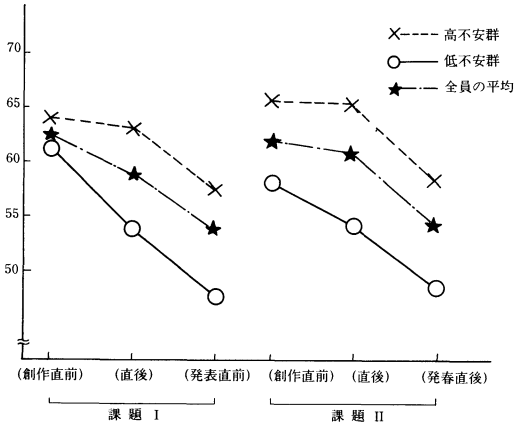


図 2-① 状態不安得点 { 低不安群  
高不安群

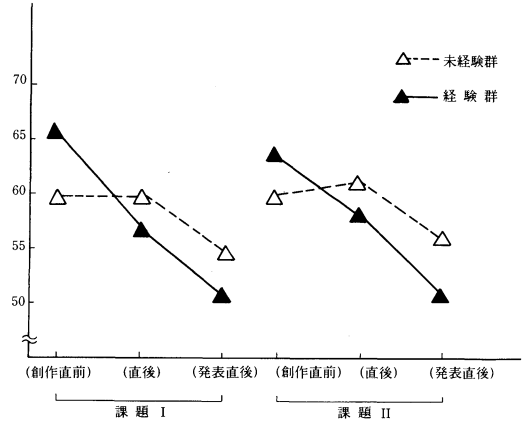


図 2-② 状態不安得点 { 経験群  
未経験群

舞踊創作過程で感じられる不安を測定するため、状態不安検査として、原岡の不安測定尺度（全19項目）を用い、100点満点に換算して処理した。測定は両課題ともに創作直前、創作直後（すなわち発表直前）、発表直後の3場面で行なった。

## 結果と考察

### 1. 状態不安について

各群の不安得点の平均値を求め、分散分析を行なった。その結果、図2-①、②に示すように、

①低不安群の状態不安得点は、高不安群に比べて低い傾向を示すが、経験群と未経験群による経験の主効果、または変化創作、自由創作という課題の主効果に有意な差は認められない。

②創作直前、創作直後、発表直後という3場面の状態不安得点は、課題Ⅰでは、創作直前>創作直後>発表直後と課題遂行にしたがい減少する。課題Ⅱでは、創作直前≒創作直後>発表直後であり、創作直後に得点の減少が見られない。なお、創作直前の不安得点は、経験群の方が未経験群より高いが、創作直後は経験群の得点減少が著しく、一方未経験群は、得点が減少しない。そのために創作直後の不安得点は、未経験の方が経験群より高くなっている。

以上の結果から

各群の不安得点が、両課題ともに100点満点中ほぼ50点以上あったことは、舞踊の創作過程で不安が感じられていることを示すものである。

低不安者の状態不安が、高不安者より低い傾向にあるのは、先にあげたBurtonの報告と同じ結果で

あり、本実験の舞踊創作過程においても、不安特性の高い者は状態不安が高く、不安特性の低い者は状態不安が低いという不安特性の影響が認められる。

経験者と未経験者ではMAS得点、すなわち性格的な不安の強さを示す特性不安の平均点にほとんど差がなかったためか、状態不安に対する創作経験の有無は、不安特性ほど強く影響していない。しかし、両課題ともに創作直前の不安得点は、経験者の方が未経験者より高いが、創作直後には逆転している。このことから、経験者は創作に対する要求水準が高く、つまり良く評価されるような作品を創ろうとする意識が強いため、「創作して下さい」という指示によって不安が高まるが、創作を終えると、それまでの体験による慣れから、作品を発表することに対しては未経験者のように不安を感じないといえる。一方未経験者は、舞踊を創作することにも、むしろ発表することに対して不安を感じるのではないだろうか。

実験終了後の被験者の内省によると、創作や発表については、両課題とも20名中18名が、「うまくいかなかった」と感じているが、「創作した」とか「発表した」という達成感が感じられており、それが不安を弱めて発表直後の不安得点が減少したといえる。とくに、「低不安者は、高不安者に比べ失敗を恐れないし、自己評価も高い」ため、課題遂行にしたがって不安が解消している。一方「高不安者は、ストレス状態で能率が下がり、失敗に対する不安が高い」ため、課題を終えても不安が軽減しにくいと思われる。

創作直後の不安得点に注目すると、課題Ⅰの変化創作では創作直前より減少するが、課題Ⅱの自由創

作では減少していない。内省によると、動きを与えられず自由に創る方がよいと答えた者は11名で、そのうち6名が未経験者である。すなわち、未経験者は自由創作の方が変化創作に比べて動きを創りやすいと感じてはいても、作品を発表することにはより強い不安を感じているといえる。

## 2. 使用空間について

VTRから作品の開始位置、作品の足跡(floor-pattern), 作品の終了位置を書き写し、9つの区分した領域のうちどの領域を使用しているのかを見た。使用空間の大きさは、足跡がある領域にはいった際に、その領域を使用したものとして、使用領域数であらわした。

- ① 作品の発表開始位置は、図3に示すように中央部の領域Eが最も多く、ついで後列(I・H・G)に多い。
- ② 作品中に使用した領域は、図4-①のように列でみ

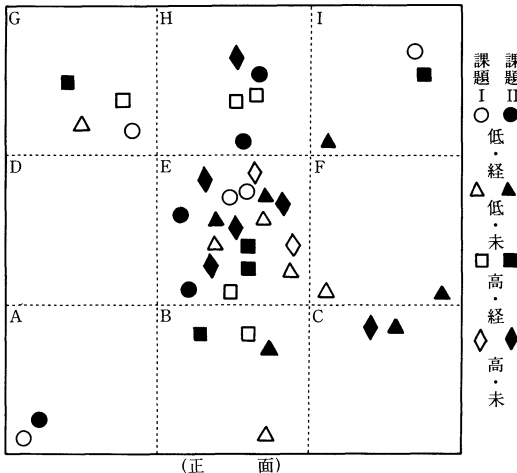


図3. 作品の発表開始位置

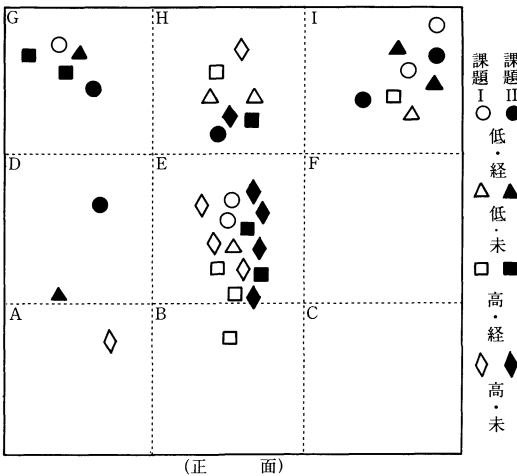


図4-① 作品の使用領域一位置

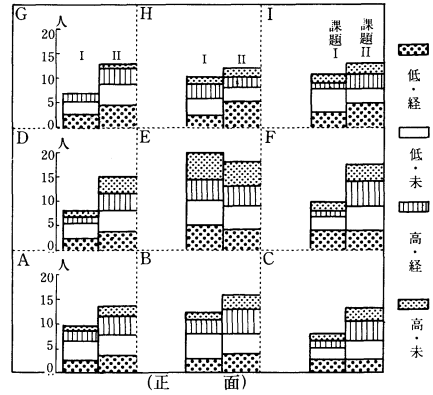


図4-① 作品の使用領域一位置

ると中列(D・E・F)次いで前列(A・B・C)を使用する者が多く、また中側(B・E・H)も多く使用されている。とくに真中のEはほぼ全員が使用している。また図4-②に示すように作品中の使用領域数は、低不安群が高不安群より有意に多い。経験群と未経験群の使用領域数に有意差は認められない。また課題IIの使用領域数は、課題Iより有意に多い。

- ③ 作品の発表終了位置は、図5のように領域Eに集中している。

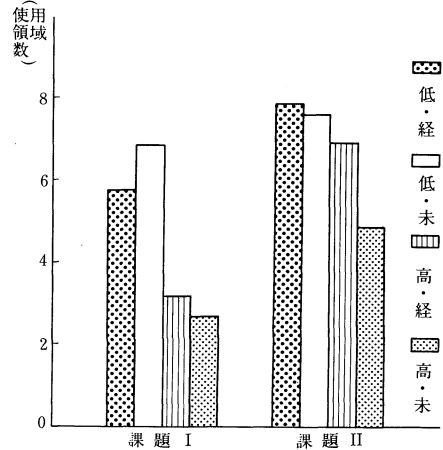


図4-② 作品の使用領域数

以上の結果から、

使用領域の位置に、創作経験の有無、不安特性の高低、課題の差による著しい特徴は見られず領域Eを中心とした空間の中央部を使用する者が多い。こうした傾向は、渡辺ら(1959)や鳥谷(1964)の報告にも見られるが、内省において、安心できる位置として領域Eを挙げた者が20名中9名と多いこと、また作品の発表は後列から始めて前進するものが多いことなどから、使用領域の位置は、安定感や運動を良く見せようとする意識と結びつきながら選択されていると考えられる。

高不安者の使用領域数は、低不安者より有意に小

さく、空間の使用が不安によって妨害されることが明らかである。すなわち高不安者は、「発表して下さい」という教示、および、見られたり、評価されることの心配、さらに与えられた空間を広すぎると意識することなどから不安を感じて、空間使用が妨害されるのであろう。

経験者は、未経験者より使用領域数が多い傾向を示していることから、経験によって意識的に空間形成を行なう、つまり空間を効果的に使用しようとする能力が養われている。

課題Ⅰの使用領域数が課題Ⅱより小さいことは、与えた動きの影響であろう。すなわち、動きのフォルムの特徴を明確にするために空間移動のないモチーフを与えると、「動きを変化させて下さい」と教示した場合にも、先に覚えた動きに束縛されて、空間移動を伴った運動には、容易に変化されないものと考えられる。これは空間移動に不安の妨害をうける高不安者に顕著である。

### 3. 使用時間について

両課題とも作品の長さをVTRから計測した。また創作時間中に、身体を動かさず同じ場所に10秒以上留まることを、「立ち止り」と定義し、回数と合計時間を測定した。①創作に要した時間は、図6に示すように、ほぼ7～10分であり、創作経験や不安特性による差はない。また課題間にも有意な差はなかつ

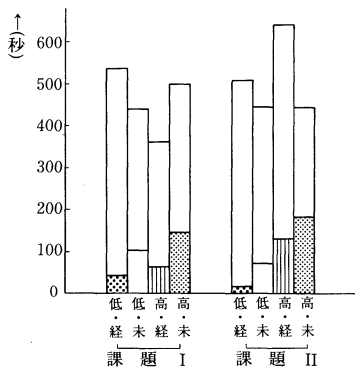


図6. 創作に要した時間と創作中の立ち止り時間(斜線部)

た。しかし立ち止り時間、回数ともに、高不安群が低不安群より多い傾向にあり、未経験群は経験群より多い傾向にあった。②作品の長さは、図7のように不安特性による差は見られないが、経験群は未経験群に比べて作品は有意に長い。また経験群の作品は、課題Ⅰより課題Ⅱの方が長い、未経験群では逆に課題Ⅰの方が作品が長い。

以上の結果から

立ち止りは、舞踊創作過程にしばしば見られる現象であり、高不安者や未経験者に多い傾向がある。川端ら(1971)も同様の報告を行なっているが、被

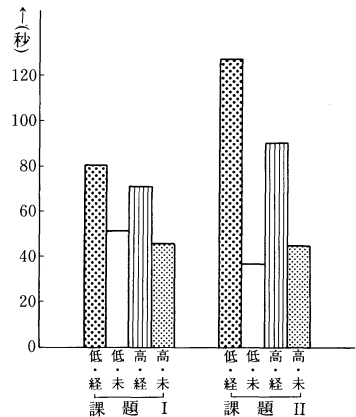


図7. 作品の長さ

験者の内省によると、「動きを思いつかない」「動きのつなぎ方がうまくいかない」など、ほぼ全員が創作中に何らかのいきづまりを感じており、立ち止りはそのあらわれと思われる。すなわち、低不安者や経験者は、いきづまりを感じても運動を続けながらそれを解決しているが、高不安者や未経験者は、運動を止めていきづまりを打開しようとする。したがって、立ち止りは、高不安者や未経験者にとって創作を進めるための1つの踏台なのであろう。

作品の長さに対しては、不安特性の影響はほとんどない。したがって高不安者であるために長い作品を創ることができないということはない。

一方、経験者の作品は、未経験者に比べて長く、とくに課題Ⅱの自由創作の作品が、課題Ⅰの変化創作の作品より長いことから、経験者は、動きのモチーフを与えられなくとも、自分のイメージにあう新しい動きの創造や、その変化、発展を容易に行ない作品を構成することができる。未経験者は、長い作品を創作できないが、動きのモチーフを与えられた方が、まとめたり構成したりする手がかりを得て、容易に作品を創ることができるようである。

以上のように、舞踊創作過程には、初心者や高不安者といった個人の特性によって、状態不安や空間の使用、立ち止りなどに著しい特徴が認められた。したがって、これらの要素を考慮した指導がなされることが望ましいと考える。なお各群が、選択したり創作した動きのモチーフと、これらの要素との関連についても検討を深めたいと考えている。

### 要 約

本研究は、舞踊創作時に感じられる状態不安および実際の創作活動に及ぼす、創作経験の有無、不安

特性の高低の影響を検討し、舞踊創作指導の手がかりを得ようとするものである。

高不安経験、高不安未経験、低不安経験、低不安未経験の4群計20名を対象に、変化創作と自由創作の2課題を設定し、課題解決時(動きづくりの過程と発表)の状態不安を、原岡の不安測定尺度を用いて測定した。同時に使用領域の位置や大きさ、創作中の立ち止り、作品の長さをVTRに記録し分析した。

その結果、舞踊の創作過程に関して以下のことが明らかになった。

1. 高不安者は、低不安者に比べ全場面を通じて状態不安が高い傾向にあり、状態不安に及ぼす不安特性の影響は、創作経験に比べて大きい。
2. 空間の使用は、不安によって妨害されやすく、2不安者は使用空間が小さい。また舞踊においては、与えられた空間の中央部が強く意味づけされている。
3. 創作中の立ち止りは、高不安者や未経験者に多く見られ、創作を進めるための1つの踏台であると考えられる。

## 文 献

- (1) Burton, E.C. Relationship Between Trait and State Anxiety, Movement Satisfaction, and Participation in Physical Education Activities The Research Quarterly 1976 vol 47-3, 326-331.
- (2) Cattell, R.B. & Scheier, L.H. The Nature of Anxiety: A Review of Thirteen Multivariata Analyses Comprising 814 Variables Psychol. Rep. 1958 4, 351-388.
- (3) 原岡一馬, 態度変容と不安 Jap. J. Edu. Soc. Psychol 1966 vol. 1, 25-36.
- (4) 川端ひろ子, 渡辺江津 舞踊の創作過程における思考内容と運動について—運動刺激による— 日本体育学会第22回大会号1978. 138
- (5) 邦 正美 舞踊の美学 富山房 1974. 109-113
- (6) 斎藤千代子 生徒はなぜダンスを嫌うのか 学校教育 1976 11, 27-33
- (7) Sarason, S. B. & Mondler, G. The Effect of Differential Instructions on Anxiety and Learning J. abnorm. soc. psychl. 1952. 47-4, 561-565
- (8) Spielberger, C.D. Anxiety vol 1. New Youk Academic Press 1972, 35-38
- (9) 高石 昇 顕在性不安検査(MAS)使用手引 三京房 1968
- (10) 鳥谷裕子 リズム運動におよぼす教示の効果 奈良女子大学文学部 学士論文 1964
- (11) 渡辺江津, 松井三雄 美的空間配置に関する研究(3) 体育学研究 日本体育学会第7回大会号 1957, vol. 2, 191
- (12) 渡辺江津, 松井三雄 美的空間配置に関する研究(4) 体育学研究 日本体育学会第8回大会号 1958, vol. 2, 86

(本論文の要旨は第6回舞踊学会—1978.10.7.において発表した)